

鯨 研 通 信

第366号

1987年1月

財団法人 鯨類研究所 〒136 東京都江東区大島3丁目32番1号

電話 03 (683) 3621 (代表)



南氷洋海域産のシャチ (CETACEA, DELPHINIDAE)の新種*

A. A. ベルジン、V. L. ヴラジーミロフ 著
渡辺 文彦 (日本捕鯨協会) 訳
吉岡 基 (鯨類研究所) 補訳

要旨：本論文は、南氷洋インド洋海区の高緯度海域（ブリュドス湾、ソドルージュストヴァ海）に生息するシャチの新種 *Orcinus glacialis* sp.n. について記述したものである。本種と類似している南氷洋海域産の *O. orca* と形態学的、生物学・生態学的比較を行った結果、種々の面に関して *O. orca* とは著しい差異があり、種 *O. glacialis* の独立性が認められた。

序：1758年に初めてC. リンネがシャチについての記載を行ってから現在に至るまで、世界の大部分の海域に生息するシャチについて研究者たちが得られる情報は、偶然に捕獲されたか、或いは沿岸にストランドした個体について記載した文献によるものである。そうした中には、顕著に現れる性的二形、生長段階における変異性、コスモポリタンな分布等の特徴により、シャチは更に多くの属や種に分類し得るとの記述も幾つか見られる（これらの記述は、南氷洋の高緯度海域の個体については触れてはいない）。しかし、*Orcinus Fitzinger* 属に関しては、1860年に全研究者の間で *O. orca* のみが認められ、以後シャチの分類法に疑問が持たれることはなく、現在までのところそれ以上の細かい分類には根拠があるとは認められていない（タミリン、1957、1962；ヘルシュコビッツ、1966）。南氷洋で捕鯨操業が始まってからこれまで、シャチの捕獲は偶然の性質を帯びていた。しかし、1979/1980年漁期にソ連は明確な目的を持ったシャチ操業を行い、南氷洋捕鯨船団ソヴィエツカヤ・ロシア号の科学班は、頭数に関して比類のない多くの資料を収集した。同船団は、この鯨種を906頭捕獲したが（当時、世界の海洋の全海域においてシャチ操業は国際捕鯨条約で

規制されていなかった）、操業期間中、すぐに体長が著しく小さいシャチに注意を引き付けられた（そのシャチは686頭捕獲された）。これらの個体はからだ全体が珪藻植物に覆われており、普通のく白色くシャチとは異なっていた。このためこれらにはく黄色くという呼び名が付けられた（以下の記述では、時々この名称を使用する）。これらのシャチは専ら魚を餌としており、流氷域内部で非常に大きな群を単位として生息している。

膨大な資料の解析と太平洋漁業海洋研究所（T I N R O）鯨類研究室で行った形態学的、生物学・生態学的な比較分析によって、南氷洋海域に *Orcinus* 属のシャチ2種が生息することを実証することができた。この事実は、以前我が国で発表された論文（ベルジン、ヴラジーミロフ、1982）の中でも既に指摘されているが、動物分類学上の命名法による国際規約を満たす新種としての記述は今までに発表されていない。

Orcinus glacialis Berzin et Vladimrov, sp.n.

標本：成熟個体一雄、体長580cm、年齢19歳以上（年齢は、1年に1本の幅の広い、明るい層が歯に形成されると考えられているので、歯を縦に鋸で切り、象牙質の層を数えて判定する）、尾鰭の高さ99cm、胸鰭の幅69cm、尾鰭の分岐点から臍まで364cm。1980年3月18日、南氷洋インド洋海区のソドルージュストヴァ海ブリュドス湾で捕獲。頭骨はT I N R O博物館№4に保管されている。

*ЗООЛОГИЧЕСКИЙ ЖУРНАЛ 1983,
ТОМ LXII, вып. 2
(動物学雑誌LXII-2, 1983, 露文)

若年個体一雄 2 頭、雌 3 頭、同上海域で同時刻に捕獲され、同博物館No.5～9 に保管されている。

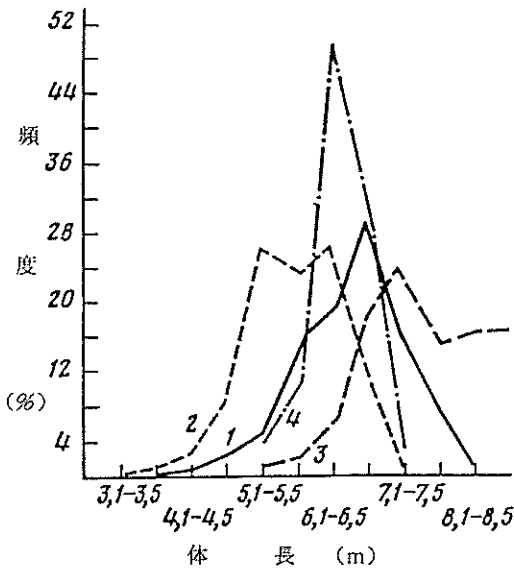


図1. 1980年に南氷洋捕鯨船団ソヴィエツカヤ・ロシア号により捕獲されたシャチの体長組成。

1. *Orcinus glacialis* 雄
2. *O. glacialis* 雌
3. *O.orca* 雄
4. *O.orca* 雌

形態についての比較：南氷洋のシャチを我々が測定したところによれば、*O. glacialis* は雌雄ともに平均して *O.orca* よりも小型である。＜白色＞のシャチ220頭（雄120、雌100）と＜黄色＞のシャチ686頭（雄328、雌358）を調べた結果では、＜白色＞は＜黄色＞より雄では112cm、雌では64cm大きい。図1に1980年に（シャチの操業が禁止となる前）、南氷洋でソヴィエツカヤ・ロシア号船団により捕獲されたシャチの体長組成を示した。シャチの体各部を測定し比較した結果、ほとんどすべての測定項目（表1、2；図2）、並びに体長が同じ成熟個体の尾鰭の面積に著しい明瞭な差異が認められた。*O. glacialis* の尾鰭の面積は、普通のシャチと比べて40%ほど小さく（図3-A）、大きさが同じである場合、普通のシャチの方が年齢は遙かに若かった。

頭骨を測定した結果（表3）では、*O.orca* の雄は頭骨が相対的に新種の雄より著しく広く、また＜白色＞のシャチの雄は、頭骨最大幅と左右眼窩幅の指数が＜黄色＞より大きく、比較的吻部も長い（図3-Ba）。また＜白色＞のシャチの雄の吻中央部の幅は＜黄色＞のシャチの雄より平均して7.1%（32.0、24.9%）広く、吻端の上顎骨の外端間の幅は＜黄色＞のシャチの雄より相対的に2倍程度（8.8、4.2%）大きかった。

表1. 南氷洋で捕獲されたシャチ *O. glacialis* の身体各部測定値

測定項目	雄						雌							
	測定値 (m)			指数 (%)			測定値 (m)			指数 (%)				
	n	M	m	lim	M	m	lim	n	M	m	lim	M	m	lim
1. 体長	3	5.80	0.16	5.70-6.10	—	—	—	3	5.20	0.12	5.10-5.40	—	—	—
2. 上顎先端から噴気孔中央	3	0.61	0.05	0.55-0.67	10.50	0.65	9.48-11.05	3	0.59	0.03	0.54-0.63	11.33	0.82	10.18-12.15
3. 上顎先端から口角後端	3	0.39	0.01	0.38-0.40	6.64	0.12	6.55-6.84	3	0.38	0.02	0.36-0.42	7.35	0.65	6.66-8.23
4. 上顎先端から目の中心	3	0.44	0.01	0.42-0.46	7.49	0.19	7.24-7.71	3	0.43	0.02	0.41-0.45	8.23	0.45	7.73-8.82
5. 下顎先端より口角後端	3	0.36	0.01	0.35-0.38	6.18	0.03	6.14-6.22	3	0.36	0.01	0.35-0.40	6.91	0.60	6.41-7.84
6. 目の中心から外耳孔中心	3	0.24	0.01	0.23-0.25	4.09	0.25	3.77-4.38	3	0.22	0.01	0.21-0.23	4.23	0.09	4.11-4.33
7. 胸鰭幅	3	0.70	0.01	0.69-0.72	11.93	0.08	11.80-12.00	3	0.42	0.01	0.42-0.43	8.10	0.11	7.96-8.23
8. 背鰭高さ	3	1.01	0.05	0.95-1.09	17.19	0.50	16.66-17.86	3	0.47	0.02	0.45-0.50	8.93	0.61	8.33-9.80
9. 背鰭基底長	3	0.73	0.02	0.70-0.75	12.50	0.45	12.06-13.15	3	0.44	0.01	0.44-0.45	8.47	0.22	8.14-8.67
10. 尾鰭後縁中央分岐点から背鰭中央	3	3.18	0.11	3.03-3.30	54.25	0.99	53.15-55.51	3	2.81	0.03	2.79-2.86	53.50	1.19	51.85-54.70
11. 尾鰭長 (左)	3	0.83	0.05	0.76-0.88	14.25	0.77	13.33-15.17	3	0.57	0.01	0.55-0.59	10.85	0.37	10.37-11.27
12. 尾鰭幅 (左)	3	0.43	0.01	0.42-0.46	7.38	0.12	7.24-7.54	3	0.34	0.01	0.33-0.36	6.51	0.21	6.29-6.79
13. 尾鰭幅 (左右両端間)	3	1.66	0.09	1.53-1.76	28.39	1.10	26.84-29.48	3	1.12	0.04	1.07-1.18	21.33	0.74	20.18-21.96
14. 尾鰭柄高さ	3	0.40	0.01	0.38-0.42	6.81	0.19	6.55-7.01	3	0.33	0.02	0.31-0.36	6.32	0.30	6.07-6.79
15. 尾鰭後縁中央分岐点からヘソ	3	3.59	0.03	3.55-3.64	61.24	1.93	58.19-62.80	3	3.32	0.08	3.20-3.40	63.09	2.78	59.25-65.88
16. 尾鰭後縁中央分岐点から肛門	3	1.98	0.01	1.97-2.00	33.82	0.81	32.78-34.73	3	1.76	0.03	1.72-1.80	33.43	1.11	31.85-34.50
17. 尾鰭後縁中央分岐点から生殖孔中心	3	2.66	0.03	2.63-2.72	45.39	1.58	43.11-46.89	3	1.90	0.05	1.83-1.97	36.22	1.57	33.88-37.64

表2. 南氷洋で捕獲された *O. orca* の身体各部測定値

測定項目	雄							雌						
	測定値 (m)				指数 (%)			測定値 (m)				指数 (%)		
	n	M	±m	lim	M	±m	lim	n	M	±m	lim	M	±m	lim
1*	9	7.55	0.09	7.10-7.90	—	—	—	12	6.41	0.16	5.20-7.00	—	—	—
2	9	0.81	0.02	0.72-0.90	10.84	0.30	9.84-12.37	12	0.72	0.02	0.54-0.85	11.35	0.41	8.81-13.34
3	9	0.56	0.01	0.52-0.63	7.48	0.13	7.03-8.15	12	0.52	0.02	0.42-0.63	7.35	0.35	6.48-10.32
4	9	0.61	0.01	0.54-0.67	8.13	0.17	7.29-8.78	11	0.59	0.02	0.49-0.72	9.09	0.31	7.80-10.95
5	9	0.50	0.01	0.44-0.56	6.68	0.14	6.05-7.26	11	0.48	0.02	0.37-0.59	7.52	0.34	6.34-9.78
6	9	0.31	0.01	0.27-0.36	4.13	0.11	3.77-4.71	11	0.30	0.01	0.25-0.42	4.55	0.13	4.16-5.51
7	9	0.97	0.02	0.87-1.05	12.97	0.30	11.82-14.34	11	0.55	0.01	0.48-0.62	8.36	0.20	7.53-9.58
8	8	1.40	0.03	1.29-1.52	18.60	0.53	16.76-20.75	9	0.69	0.02	0.60-0.78	10.61	0.25	9.44-11.57
9	8	0.89	0.02	0.81-1.01	11.83	0.25	10.98-12.90	9	0.66	0.03	0.54-0.84	9.85	0.45	8.21-12.04
10	7	3.87	0.02	3.35-4.26	51.41	0.90	48.64-54.61	8	3.44	0.14	3.08-4.11	52.01	0.85	49.33-55.76
11	9	1.25	0.02	1.18-1.37	16.64	0.40	15.30-18.66	11	0.83	0.01	0.79-0.88	13.15	0.18	11.94-13.81
12	9	0.63	0.03	0.55-0.82	8.27	0.33	7.65-10.47	11	0.48	0.01	0.41-0.55	7.39	0.16	6.67-8.32
13	9	2.51	0.03	2.36-2.74	33.40	0.52	31.14-35.51	9	1.67	0.02	1.60-1.83	26.84	0.44	24.64-28.41
14	9	0.54	0.02	0.43-0.65	7.18	0.25	6.10-8.22	10	0.42	0.02	0.33-0.52	6.60	0.27	5.56-8.13
15	9	4.67	0.10	4.20-5.10	62.31	0.80	59.25-65.93	10	3.84	0.10	3.53-4.47	59.93	0.91	55.47-63.90
16	9	2.52	0.06	2.26-2.80	33.52	0.48	31.54-35.57	11	2.11	0.07	1.88-2.63	32.22	0.34	30.20-33.63
17	9	3.34	0.11	2.92-3.89	43.87	0.61	41.11-46.20	11	2.30	0.08	2.02-2.88	34.95	0.48	32.02-36.91

*測定項目は表1を参照

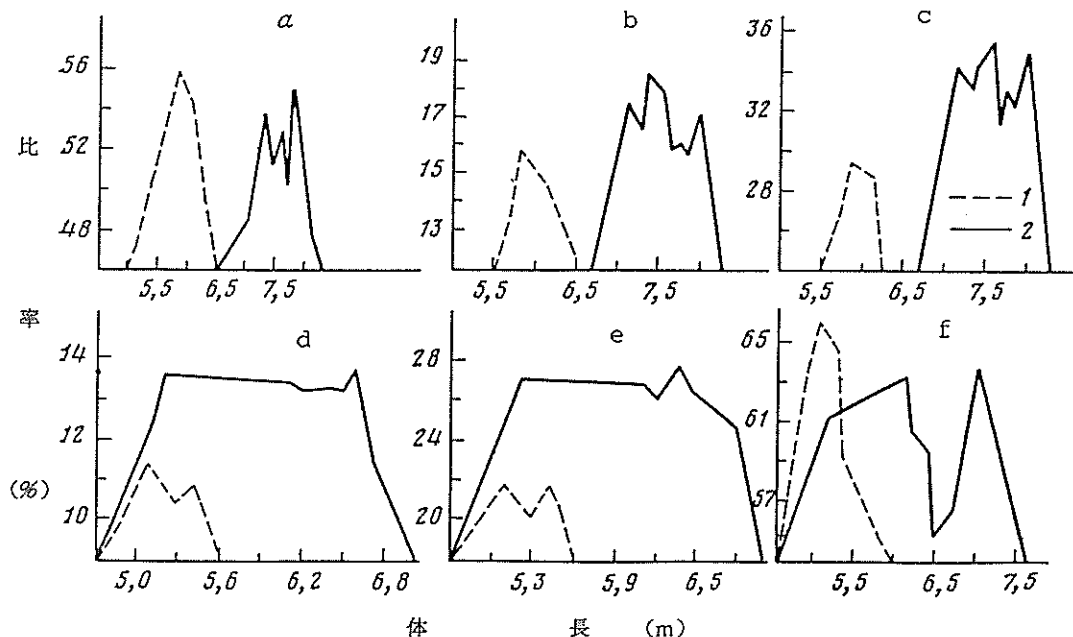


図2. 南氷洋産シャチの体各部の比率。

1. *Orcinus glacialis*, 2. *O. orca*.

a~c-雄, d~f-雌。a-測定項目10, b, d-同11, c, e-同13, f-同15

表3. 南氷洋海域で捕獲されたシャチの頭部各部の測定値 (成熟個体)

測定項目	<i>O. glacialis</i>								<i>O. orca</i>							
	雄				雌				雄				雌			
	測定値 (cm)			指数 (%)	測定値 (cm)			指数 (%)	測定値 (cm)			指数 (%)	測定値 (cm)			指数 (%)
	n	M	lim		n	M	lim		n	M	lim		n	M	lim	
頭骨基底長	4	82.6	81.0-84.1	100.0	5	81.8	78.7-85.2	100.0	2	113.3	108.8-118.7	100.0	2	91.6	81.9-101.3	100.0
頭骨最大幅	4	54.8	52.5-56.4	66.3	5	54.9	53.6-56.5	67.1	2	80.7	74.2-87.2	71.2	2	58.3	52.8-63.9	63.6
左右眼窩幅	4	46.1	44.2-48.0	55.8	5	45.8	45.5-46.9	56.3	2	67.6	63.2-73.0	59.6	2	52.3	52.0-52.7	57.0
吻中央部幅	4	17.2	16.4-18.5	20.8	5	17.3	15.8-19.5	21.1	2	22.1	22.0-22.3	19.5	2	18.7	17.0-20.4	20.4
吻長	4	39.4	38.3-40.2	47.7	5	38.5	36.4-40.0	47.0	2	61.4	60.5-62.3	54.1	2	43.4	36.8-50.0	47.3
吻基底幅	4	27.6	26.5-29.3	33.4	5	27.7	27.3-28.5	34.1	2	39.8	37.0-42.7	35.1	2	28.6	27.2-30.0	31.2
下顎長(右)	4	67.3	65.3-68.4	81.4	5	66.8	65.4-68.9	82.4	2	95.4	91.6-99.3	84.2	1	82.6	-	90.1
基底部での下顎高(右)	4	19.7	19.1-20.3	23.8	5	20.5	19.3-21.8	25.0	2	29.3	28.1-30.5	25.8	1	22.0	-	24.0
歯列後端下顎高(右)	4	9.6	9.4-9.8	11.6	5	10.0	9.5-11.0	12.2	2	15.8	14.8-16.8	13.9	1	13.0	-	14.1
上顎歯列長(右)	4	32.1	31.4-33.2	38.8	5	31.4	30.3-33.6	38.3	2	47.2	46.0-48.5	41.6	2	35.2	31.5-39.0	38.4
下顎歯列長(右)	4	29.3	28.5-30.0	35.4	5	28.7	27.1-30.5	35.0	2	42.5	41.6-43.5	37.5	-	-	-	-

雄の頭部については、鋤骨の後端からその骨頭までの長さは、〈白色〉のシャチの11.4%に対し、〈黄色〉のシャチの19.6%であった。翼状骨の後端から骨頭までの長さはそれぞれ32.0、37.6%、椎間孔上縁から後頭骨頂までの長さは、26.5、31.5%、骨頭間の間隔は10.5、14.5%であり、いずれも差が認められた。大部分の鯨種は頭部の可動性が非常に限られているが、特にシャチのそれは限られているにも拘らず、〈白色〉と〈黄色〉のシャチでは頭骨の状態は体軸(脊柱の首の部分の軸)に対する関係において図3-Bに示す通り、著しく差異があるとみなすことができる。側頭窩の形及び筋肉の側頭窩の固着面積にも、同様に差異が観察された(図3-C)。雌の頭骨については、両者に雄のような明瞭な差異は認められていないが、*O. glacialis*の雌の下顎とその歯列は*O. orca*に比べて相対的に著しく短い。

歯を比較すると、両者間のその大きさには著しい差があることがわかった。雄の差異は上顎と同様に下顎でも驚くほど著しい。そして、*O. glacialis*の雄の歯列の中間部にある歯(すなわち、最も大きい歯)、成長の止まった歯(歯髓腔が閉じたもの)は、南氷洋海域産*O. orca*の雄のまだ成長の止まっていない(歯髓腔が顕著に現れている)歯と比べて、高さや幅は半分で重さは各々4分の1であった(図3-D)。*O. glacialis*の歯髓腔の閉鎖は〈白色〉のシャチより著しく早い時期に生じる。平均して〈黄色〉が大体20~22歳、〈白色〉が33~35歳頃である。歯から我々が判定した*O. glacialis*の最高齢は21歳、南氷洋海域の*O. orca*では30歳であり、しかもこの歯はまだその成長を終え

てはなかった。このように、〈黄色〉と同じ年齢の〈白色〉のシャチは、肉体的に著しく若いと結論づけることができる。このことは、骨の癒合状態でも同様に認められ、*O. orca*では、額部の上顎骨、口蓋の翼状骨及び上顎骨、頭頂部の上部後骨は癒合していないが、これよりも年齢の若い*O. glacialis*のこれらの骨はすべて癒合していた。

*O. orca*の雄の上顎歯列後端部での歯槽の深さは、中央部のそれとはほぼ同じであり、中間歯槽の分壁は顕著に現れている。一方、*O. glacialis*の雄の歯列の初めと終わりの歯槽の深さは、中央部の3分の2であり、中間歯槽の分壁は吻の基底部に近い最初の6歯槽にだけ現れており、*O. glacialis*の歯組織にはこれらの分壁は存在しない。

概してシャチの体色は似かよっているが、予備的に解析した結果では(エヴァンス、ヤプロコフ、1978)、これら2種の間には、目の下と肩及び生殖孔部分の波形の変異の出現頻度に、統計的に差があることが示されている。

生理学的比較：*O. glacialis*の成熟雌の最小体長は3.8mで、*O. orca*では5.7mであった。しかし、平均的な成熟体長は〈黄色〉が4.8~5.0m、〈白色〉が5.8~5.9mである。調査した〈黄色〉のシャチの雌のうち、77%が体長4.6~4.9mにも拘らず既に出産経験があり、さらに、そのうち数頭のもの2回以上の出産経験があった。それに対し、体長5.7~5.9mの〈白色〉のシャチでは、雌の60%はまだ成熟していなかった(図4)。捕獲された*O. orca*の雌の中で妊娠して

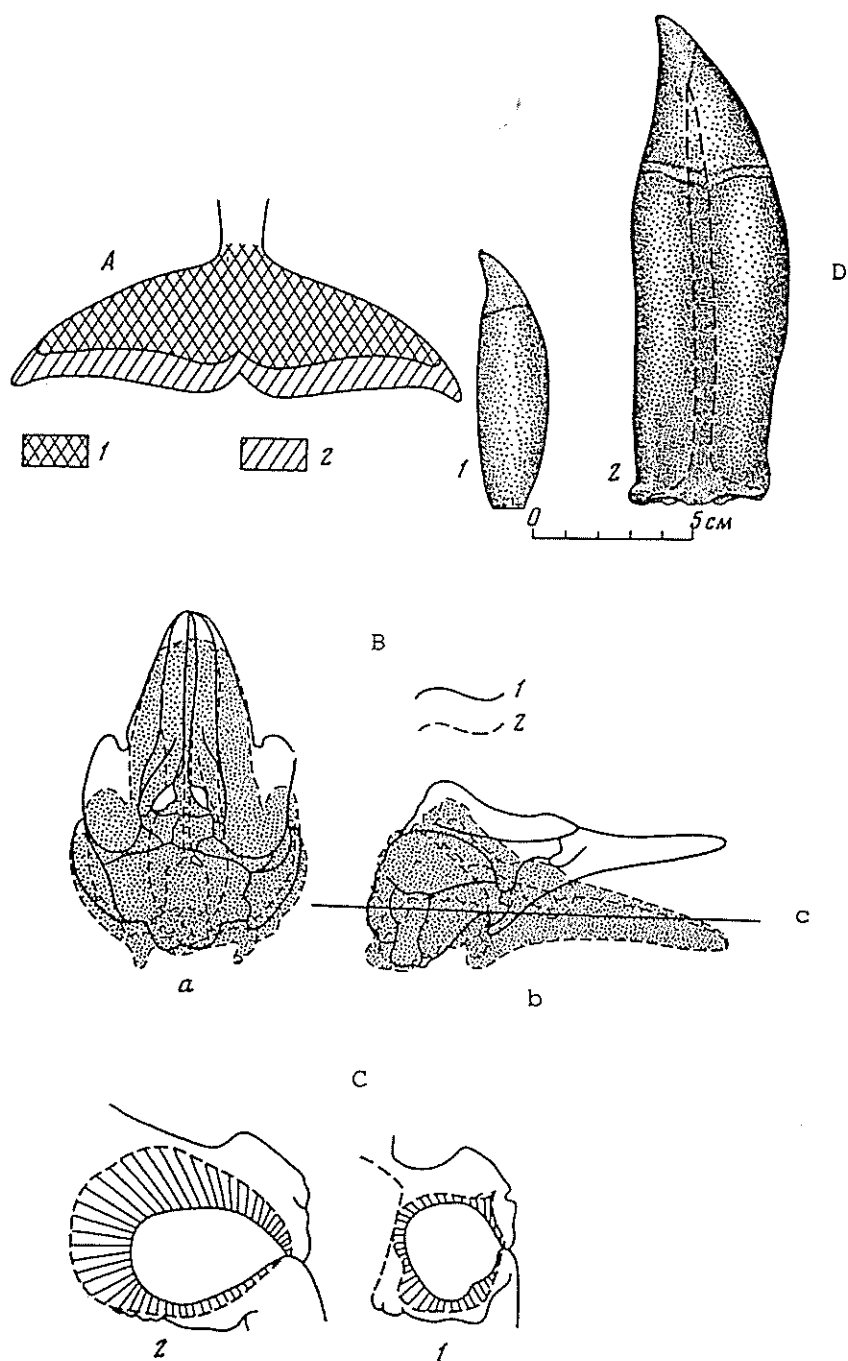


図3. (A)尾鰭の面積の比較, (B)頭骨の形状の比較, a. 背面 b. 側面, c. 頸部軸
(C)側頭窩形状の比較 (斜線部は筋肉の附着部を示す), (D)歯の大きさの比較
1—*Orcinus glacialis*, 2—*O. orca*

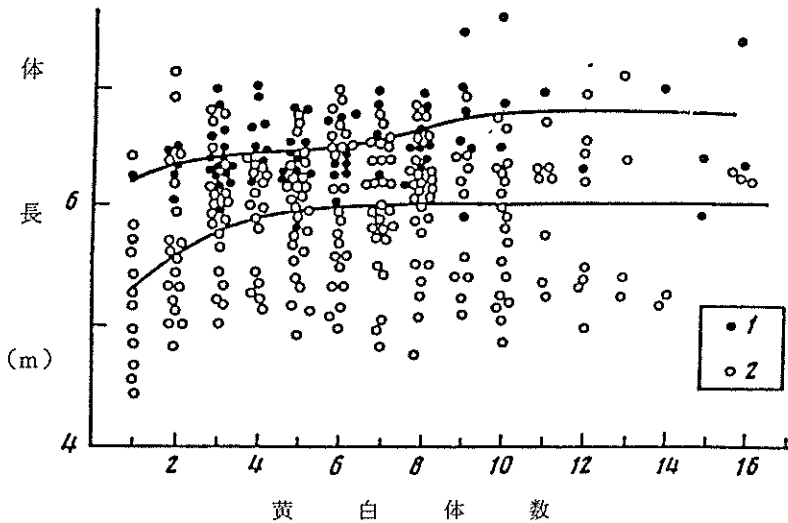


図4. 黄白体数と体長の関係

黒丸, *Orcinus orca*, 白丸, *O. glacialis*

いた個体は26.6%であり、*O. glacialis* は45.0%であった。妊娠していない雌は、各々45.1、29.1%であった。黄白体数が同数の場合、*O. glacialis* の方が *O. orca* の雌より平均して体長が小さかった（1 m以内の差）。しかし、平均黄白体数は、*O. orca* で5.4、*O. glacialis* で5.98と両者でほぼ同じであった。

分布・生態の比較：ソヴィエツカヤ・ロシア号船団によって *O. glacialis* が捕獲された場所は、氷縁辺の状態により緯度は様々であるが、経度では60°～141°40' Eの範囲であったが、本種の分布はこの範囲より広いものであり、恐らく南極の周囲全域に生息していることに疑いの余地はないであろう。

シャチ2種は極めて近い海域に生息している。しかし、2種の混合群は観察されなかった。＜黄色＞のシャチは氷縁辺及び流水域に生息している。それに対し＜白色＞は氷の無い海域を好んでいる。*O. orca* の群は通常、10～15頭で構成され、南氷洋ではこれらの群は互いに8～10マイル離れている。これと比べて *O. glacialis* は150～200頭の群を形成し、その距離は著しく近い。

また、785頭のシャチの胃（＜白色＞—156、＜黄色＞—629）を調べたところ、その内容物は次のように、南氷洋における両者の餌生物の根本的な違いを表わしていた。

O. orca ——魚類—3.2%、海産哺乳類—89.7%、スルメイカ—7.1%

O. glacialis ——魚類—98.5%、海産哺乳類—0.4%、スルメイカ—1.1%

考察：*Orcinus* 属の種の間で、頭骨各部の比率、歯の大きさ、尾鰭の面積などの形態学的な点で差異があるのは、シャチの摂餌方法や餌料生物に違いがあることが大きな理由であると考えられる。＜白色＞のシャチは大型の海産動物を餌としており、＜黄色＞はほとんどが専ら魚類を捕食している。

Orcinus 属のシャチについて上述した形態的差異は、地理的隔離障壁がなく、極めて近い海域に生息する場合、遺伝的隔離を示すものであるとみなすことができる。しかし、*O. glacialis* の分布の限界、*O. orca* とその相対的な関係についての問題は今のところ全く明らかではない。これらは、今後の研究により解決しなければならない問題である。

海洋の無氷海域における非常に限られた頭数の鯨類の捕獲でさえ（その中には、シャチも含まれる）、捕鯨船団のキャッチャーボートを使用して初めて可能となる。したがって、シャチは南氷洋で操業が始まってからこれまで、氷の外に生息している大型鯨種に付随してまれに捕獲されただけである。これまで長年、各国の捕鯨によって捕獲されてきた少数のシャチが *O. orca* であった可能性が高いことは明らかである。捕鯨船以外の船舶（探索、砕氷等）でも確実に観察はしていたように、＜黄色＞のシャチを目視観察することは可能であった（しかし、観察は観察に過ぎない）。

鯨 研 通 信

今まで本種が生息する氷の中では捕鯨操業は実際に行われていなかったが、1980年に南氷洋で明確な目的を持ってシャチの大量捕獲を行うことによって（最初、*O. orca*、その後 *O. glacialis*）、初めて幅の広い比較調査を行うことができ、これによって *Orcinus* 属の新種を分離することが可能になったのである。

文献：

- ベルジン、A. A.、ウラジーミロフ、V. L.、1982.
南氷洋産シャチの新種。プリロード誌 6—31。
タミリン、A. G.、1957。ソ連及び隣接する国々の動物—9—鯨類。ソ連科学アカデミー、1—756。
タミリン、A. G.、1962。ソ連海域の鯨の動物相—ソ連の動物相の分類書、ソ連科学アカデミー、1—212。
エヴァンス、V.、ヤプロコフ、A. B.、1978。シャチ (*Orcinus orca*) の体色の種内の変異特性、鯨

と鯨脚類の研究における新発見。ノウカ102—115。
Hershkovitz, Ph. 1966. Catalog of living whales.
246. 1—259.
Bull. Smithsonian Inst. U.S. Nat. Museum,

本報文は、南氷洋に *O. orca* に比べて小型のシャチが生息し、これを新種として記載した興味深いものである。しかし本文中では、形態、分布、生態などいくつかの観点について両者に違いがあることを述べているものの、その比較の方法についての記載は不十分・不明瞭であり、論理的に理解し難い部分も多かった。この報文に記載された程度の違いと記述法では小型のシャチを新種として記載するには無理があり、認められた差異は系群の違いを示すものと考えるのが妥当と思われる。そうした意味も含めて、今後もこの問題についてさらに研究の必要があろう。

(吉岡)

道東太平洋近海で漁獲された

アカボウクジラ

北海道立釧路水産試験場 中田 淳

1986年6月16日、北海道釧路港に1頭のクジラが陸揚げされ、話題となった。問題のクジラは前日の6月15日、北緯40度20～30分・東経146度30分（表面水温

9℃）の海域で、サケマス漁船の表層流網で捕獲され、解体されずに同港に持ち込まれたものであった。種の同定を依頼された著者は、早速現場に出向き写

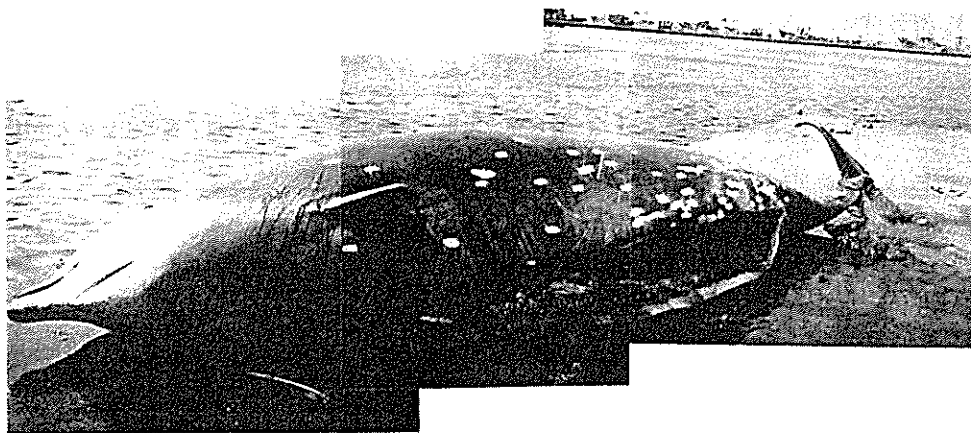


図1 道東太平洋近海で捕獲されたアカボウクジラ。

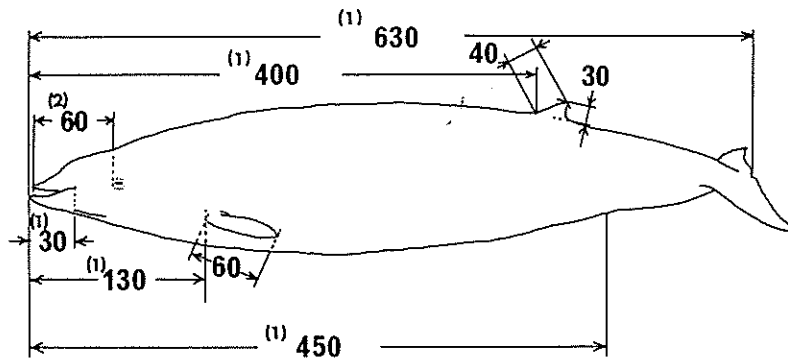


図2 道東太平洋近海で捕獲されたアカボウクジラの外部形態計測値(単位: cm)。

(1) 下顎先端からの計測値、(2) 上顎先端から目の前縁までの距離。

真撮影を行方(図1)、巻尺を用いて体長など外部形態の測定を行った。各測定値は図2に示す通りである。

体は紡錘形で中央部が太かった。嘴は短く、下顎の先端に1対の歯を有していた。胸鰭と背鰭は比較的小さかった。体色は頭部前方が灰白色、その他は青味がかった黒色で、小判状の白色斑が多数分布していた。特にこの白色斑は腹側の肛門前方付近に多かった。

後日このクジラの写真を国立科学博物館の宮崎信之博士にご鑑定いただいたところ、本個体はアカボウク

ジラの雄であることが判明した。

釧路港への海産哺乳類の水揚げは、市場関係者によると、これまでイシイルカなどイルカ類ではみられたが、今回のアカボウクジラのような数メートルに達するクジラが、しかも丸々1頭持ち込まれたことはなかったそうである。

注:本報告は、ストランディング・レコードO-2として登録された個体についてのものです。

(編集部)

ストランディング・レコード - 3

番号	日付	種類	頭数	場所	報告者	備考
O-4	7/7/1986	アカボウクジラ	1	青森県大戸瀬 (定地網)	古賀隆弘 (浅虫水族館)	体長410cm、雌。
O-5	9/9/1986	ハンドウイルカ	1	青森県浅虫川 河口	阿部恵一 (浅虫水族館)	雄。釣り人による発見。

©上記の情報は国立科学博物館宮崎信之氏のもとに寄せられたものです。ストランディングレコードは、本号より吉岡が担当させていただきます。海産哺乳動物のストランディングについての情報がありましたら、鯨研までお知らせいただければ幸いです。
(鯨研・吉岡)